

事業報告書 (令和2年度)

事業名 未来に生かす里山再生事業 ～南海トラフ地震への対策を旨として(5)～団体名 就実・森の学校 担当者名 石田省三

※活動の様子がわかる写真(データもお願いします)と説明を必ず添付してください。

1. 活動内容(日時、場所、参加対象者、人数、内容等)			
本年度は新型コロナウイルス蔓延の影響により、例年実施してきた多くの行事を取りやめることとなり活動が大きく後退した。通常の施設管理以外の活動を報告する。			
開催日時	行事名	参加者	備考
1	8/20	竹材伐採搬出(朝日高校)	100 体育祭用(例年実施)
2	9/12	高二SDGsグループ活動1	17 SDGs活動開始
3	9/21	藍染め体験教室	8 森の学校で栽培した藍を使用
4	10/4	高二SDGsグループ活動2	15 防災活動《町内会長来校》
5	10/11	藍染め体験教室	9 乾燥藍染め
6	10/13	就実小学校どんぐり拾い	85 小学校一、二年生
7	10/20	就実こども園どんぐり拾い	75 4,5歳児
8	10/25	第1回グリーンボランティア	143 アカマツ林整備
9	10/27	野外生活体験	50 小学校3年生
10	11/6	高二SDGsグループ活動3	15 防災・現地調査、避難経路看板
21	11/8	高二SDGsグループ活動4	8 里山の幸《シャシャンボ採取》
22	11/19	高嶋お日様幼稚園来校	80 4歳児、焚火、焼き芋、
23	11/22	第2回グリーンボランティア	107 アカマツ林整備
24	11/24	兼基町内会と防災協定締結	20 就実高校にて
25	11/29	里山の魅力展(1)	17 SDGsグループの成果発表
26	12/1	せいな保育園来校	10 笠井山・植林地散策
27	12/6	TSC 里山ウォーク	50 TSC主催事業
28	12/20	里山の魅力展(2)	20 (1)同様協力:JA岡山はなやか
29	3/18	津島幼稚園来校	140 里山散策
2. ESDの視点を取り入れたところ、ESDの視点で見直したところ			
<p>里山で実施する様々な活動を通して、児童、生徒、また地域の方々に、その重要性を再認識してもらうように努めてきた。今年度は本地域の重要課題の一つである防災に取り組んで7年目となるが、活動内容及び新たな取り組みについて報告する。</p> <p>今年度も例年同様、避難地の整備、避難経路を維持するために、道の整備、また緊急用エネルギー源としての竹炭・木炭を焼成し、備蓄していく活動を実施した。特に、今年は学校をあげてSDGs活動を推進していこうとする気運が高まり、今まで以上の成果を上げることが出来た。</p> <p>「就実・森の学校」の活動は緑の回復にも力を入れており、絶滅しつつあるアカマツ林</p>			

の再生、およびコパノミツバツツジの回復にも取り組んでいる。グリーンボランティアと
いうこの活動にも参加者が増えており、今後の活動の広がりにも期待が持てる
ところである。

3. 取組の成果（参加者にどのような意識や行動の教育上の成果があったか。感想など）

今年度は、学校全体でSDGsに取り組むことになった。その成果の1つとして、高校生が防
災について調査研究をすすめ、最終的には、岡山市中区兼基町内会と防災協定を結ぶこと
になったことをあげることが出来る。生徒たちは、地域の緊急の課題の1つである内水氾
濫に取り組み、現地調査や、聞き取り調査、また国土交通省、岡山市危機管理室での調査
を通して、その原因と解決方法を調べ、岡山市中区兼基地区との防災協定の締結に至った。
地域の方々と協働し、安心・安全な生活を保持していく方法を考え、学ぶことが出来るよ
い機会だったと思われる。

2月中旬には、高校1年生を対象に、「就実・森の学校」がすすめている諸活動について
講演する機会を持つことが出来た。そして、来年度早々には今年度中心として活動してき
たグループによる活動報告会も予定されており、活動の輪が広がりつつある。この機会を
うまく活用し将来につなげていきたい。

4. 今後の課題と展望

防災に関する、今後の課題としては、避難地の設備の充実をまず上げておきたい。現在、
避難地は1万m²程度であるが、できるだけ広い用地を確保するため、今年度、避難地南東
の一角（約20m×50m）の竹を伐採し平坦地を造成した。しかし、避難してくるたち
のためのトイレの増設、水の確保のためのタンクの設置（500リットル×2）を計画したが
いまだ実現していないのが実情である。次年度は水の確保を最大のテーマと設定し、バイ
オトイレの導入も検討したい。

本事業を始めて11年目となるが、常に問題となるのが次世代への引継ぎ問題であると毎
年報告してきたが、先に述べたように、今年から全学を上げてこの問題に取り組んでい
こうとする兆しが見えてきた。この動きを大切に育てていくことが出来れば将来への展望が
開けてくるものと思われる。